

### 新しくできた繋がりも財産

準備を進める過程で、スタッフは入居者全員にきめ細かいヒアリングを行い、「本当に欲しいもの」や「好きなこと」を探りました。

「その人が主役になるにはどうしたらいい？」と考えることで、人に寄り添う力が少し上がったというか、福祉に関わる者としてのレベルアップにつながったと感じています（ひまわり、内升宏美さん）という声もあり、各々が気づきを得る機会になったようです。

また、「施設間で横断的なコミュニケーションを取ることで、縦割りの解消にもなり、お互いの良さが把握できた」、「ボランティアスタッフのパワフルな実行力には恐れ入った！」などという声も聞かれました。

今回の祭りでは、準備から当日まで、町議会議員でもある扇谷光恵さんをはじめとして、美術の先生や美容師さん、畳屋さん、崎カフエやラディーチェといった飲食店、なかむら旅館、島のほけんしつ蔵など、島外の方を含め、数多くのボランティアが大活躍していました。

「ボランティアの皆さん無しでは実現できなかった。特に高校生たちの存在が大きくて、ファッションショーが出来たのは彼らのおかげ。お年寄りの力を引き出してくれた気がします」（福来の里、久保嘉代子さん）



### 島の福祉観に変化を

企画から深く関わった前田陽汰さん（島前高校3年生※当時）は、祭りを終えた感想として、「じょんじょん祭りで、海士町の福祉の“器”が大きくなった気がする。福祉＝介護という狭い世界で語られがちですが、そうではなくて、祭りをすることも福祉ですね」と述べています。

内部からも、「ボランティアの方や健康福祉課長など、施設以外の協力者の方とも一体になれたのを感じました。今後何かしら続けていきたい」（諏訪苑の新谷喜久枝さん）

「全体として、いい風が吹いたなという印象。せつかく風通しが良くなったのだから続けたいと意味が無い。演芸、カラオケ、茶話会など、テーマを一本に絞れば続けられそうですね（諏訪苑の中山恵子さん）など、今回の祭りでスタッフも少なからずじょんじょんを感じ、「続けたい」という気持ちになりました。」

祭りに両日参加した大江町長は、

「施設に入居した高齢者の方は淡々とした生活になりがちですが、今回の祭りで『大勢に注目してもらえた』『主役になった』とじょんじょんしたことが、皆さんの笑顔から伝わってきました。開催の目的は、入居者の方々が主役になることもそうですが、高齢者福祉施設の3法人が共同で運営すること、そして、入居者の方々が日頃の生活の中でちょっとした変化を求めているということを関係職員並びに地域の方々に気づいてもらうことでした。この祭りを実現できたことで、笑顔にあふれ、いきいきと暮らすことができる島になるための海士町の想いを、島内外に発信できたと思っています」とコメント。

また、海士町の『福祉の魅力化』について、「高齢者福祉施設（諏訪苑、ひまわり、福来の里）と障がい者関係の施設（さくらの家）、児童施設（けいしょう保育園、お山の教室）などが交流を深め、連携しあい、時には世代や生活状況を越えて、そして地域の方々も加わって、子どもから高齢者までが『いつも、ちえだつて』近い存在で生活を営めることを目指したい。全ての施設を一つの法人が一貫して運営するようなイメージで、その橋渡し役を町が率先して務めていきたい」と語っています。

利用者さんの夢を叶えるべく、「どうしてもまた食べたい」と願う「どじょう鍋」をスタッフが用意！約50年ぶりにどじょうと対面した心境は？



カラオケ喫茶やカフェで楽しくお喋り



衣装合わせで既にじょんじょん



当日のヘアメイクにも多数のボランティアが

海士町の福祉 3 施設合同企画

# “わたしが主演” じょんじょん祭り

ファッションショーに堂々出演！皆さんいい笑顔



※じょんじょんとは、わくわくと心が弾むような気持ちを表す隠岐の方言です

3月9日、10日の2日間、保健福祉センター「ひまわり」と特別養護老人ホーム「諏訪苑」を会場に、高齢者福祉施設の入居者・利用者とその家族に向けたイベント「じょんじょん祭り」が開催されました。

ひまわり、諏訪苑、さらに「福来の里」という町内の3福祉施設が初めて合同で取り組んだ催しで、プロジェクトリーダーの小野木大悟さん（諏訪苑に勤務※当時）ほか実行委員を中心に、各施設のスタッフが協力しあつて昨年7月から準備してきました。

初日のメインは、ひまわりでのファッションショー。赤じゅうたんが敷かれ、思い思いの衣装で着飾った入居者さん約70名（70代〜90代）が、高校生やご家族と一緒に晴れ舞台に立ちました。カメラに向かってポーズを決めたり笑顔で手を振ったりする様子はまるでファッションモデルのようで、皆さん生き生きと楽しげな表情を見せていました。

海士町出身カメラマン、崎野裕さんによる撮影会も同時開催。会場には高齢者の皆さんの写真や、本人が主演のストーリーブック等を展示したほか、コメントを投函できるポストも設置し、来場者と入居者とが交流できる工夫が凝らされました。

2日目は諏訪苑で、大勢の町民が出演して演芸大会が行われ、踊りはもちろん笑いを誘うショータイムも満載。フィナーレのキンニャモニャでは、最前列に座っていた方（95歳）がじょんじょん極まってステージに上がり、見事に踊りきって拍手喝采を浴びるという一幕もありました。（表紙写真）

## 「僕たちの未来なんだよ」

祭りの狙いを小野木さんに聞くと、「何より、お年寄りに楽しんでもらうこと！長生きしてよかったと思ってもらえたら最高。施設の垣根を越えることで同窓会にもなって、久々の再会の喜びを味わってほしくて」

さらに、福祉施設を“開く”ことも大きな目的のひとつでした。「なるべく多くの人に関わりを持ってもらって、施設のことをより深く知ってもらおうキッカケにしたいと考えた。特に諏訪苑は、他人事じゃなくて、僕たちの未来なんだよ。みんなが自分ごととして考えるべきことだって、気づいてもらいたい」（小野木さん）



演芸大会の様子